

チェルノブイリ通信

2003年12月6日

No. 58

発行 チェルノブイリ支援運動・九州 事務局

連絡先 福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16(株)ウインドファーム内
TEL・FAX 093-203-5282

E-mail jimur@cher9.to

URL <http://www.cher9.to/>

郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州



ベラルーシのひまわり畑

* 第3回プレスト移動検診
医学生 高橋恵理佳さんの報告

* 雪だるま号の廃車に際して

* 雪だるま2号キャンペーン
朗読とリードオルガンの共演を終えて

* 2004年夏ベラルーシ調査隊募集案内

* 2日間だけのチャリティーショップ
スネガビーク手芸店の様子

* チェルノブイリ支援運動・九州事務局奮戦記
検診の事前準備の様子

日本の医学生が体験したベラルーシ

移動検診に参加して分かったこと、感じたこと、 忘れられない風景と言葉の数々



高橋 恵理佳さん
日本医科大学4年生



プレストでの検診の様子、真ん中の女性が高橋さん

2003年6月に行われた第3回プレスト検診には、現在、日本医科大学で学ぶ高橋恵理佳さんも同行した。これから医学の道を歩む高橋さんが、移動検診やベラルーシを旅するなかで感じたことを報告してくれた。

「その通り、森は美しい。」

だから汚された時にはすごく悲しかった。」

2003年7月 プレストにて

前日から降り続いてきた雨が止むと瞬間に太陽が照りつけた。その光線はナイフのように鋭く肌を突き刺す。雲の中で養った生命力が一瞬にして降り注がれたが如く、

木々は少し慌てて眠りから覚め凍とした姿勢に身を正す。ここでは生命の息吹が感じられる。不思議なことにも自分が生きていくという当たり前のことを思い出したような気がした。アスファルトやコンクリートに遮られることなく有機体の営みを直接肌で感じたことが私をそのような気分にしたのかもしれない。自分も生物の一員であり、ここでこうして呼吸をしているのだ。

そもそも私は誤った先入観に捕らわれずぎてきた。今となっては何とも失礼極まりない話だと思うが、チェルノブイリの事故による被爆国という言葉から、正直なところベラルーシという見たことも聞いたこともない国について勝手に灰色がかかった薄暗いイメージを持っていた。放射線を浴びた

国、被害に遭った国、傷ついた国、事故当時幼かった私にはその時の映像の記憶がなく、

小学生の時に社会科で事故について少しだけ学んだ時に見た一枚の写真からずっとそのような暗い想像をしていた。そして事故から随分時間が経った今でも事故当時の姿とそれほど変わっていないのだろうと思いつ込んでいた。

ところが実際に目の当たりにしたものは広く真つ青な空と惜しみなく光を放つ太陽や、森、湖といった鮮やかな原色の自然の恵みの中にある、うんざりするほど大きな金色の畑である。何て美しい国なのだろうと呆氣にとられてしまう。まるでこの世の楽園ではないか。自分が何のためにここに来たのかさえ忘れて心が踊りだし自然のなかに溶け込んでいく。被爆という言葉に気が構えしすぎていたのか。思ったよりも大したことなかったのではないか。検診を受けた患者さんも明るくて元気そうだったではないか。

「その通り、森は美しい。だから汚された時にはすごく悲しかった。」

リユータに言われてハッと我に返った。

ああ、この言葉を一生肝に銘じておこう。浮かれていた自分が恥ずかしい。その時彼



プレストでの検診に訪れた母子



プレストでの検診の様子



プレストの街並み

女の首にある甲状腺手術の跡の意味を考え直した。

深い闇のような悲しみは確かにある。それは彼女達の心の中に潜んでいる。ただ生きていく以上いつまでもそこで立ち止まっている訳にはいかなかったから、そこから時計の針を進めてきたただけなのだ。私は自分の中で彼女達の時計の針を事故当時のまま止めていた。だからかなり時間の経った姿を見た時にギャップが大きく、愚かな思い違いに走ってしまった。永遠に癒えることのない悲しみに心を震わせながら、それでも少しずつ少しずつ時計の針を進めていったからやっと今の姿に到った。微笑むこともできるようになった。最初からこうだったわけではないのだ。強いのではなく、強くならざるを得なかったこの国とここで暮らす人々の心中を思うと、自分が今まで彼らのそのような苦渋の過程を何も知らずにいたことが情けなかった。事故のこととは知っていても、その後彼らがどうしているのか知らない。私の時間が進むのと同じように、彼らも時を刻んできたのに……。

もう無関心な傍観者はやめよう。彼らの時計と私の時計を重ね合わせて、一緒に時を進めていこう。心の絆でつながっていることが少しは彼らの助けにならないだろう

か。悲しみを少しだけ肩代わりして持つてあげることができないだろうか。彼らは私達の誰も之恩恵を受けている科学の進歩の犠牲者である。それなのに知らないふりをしてはいけない。彼らに全てを押し付けてしまつのは卑怯者のやることだ。世界の多くの人が目を向けなくなつてからも彼らは必死に自力で立ち上がってきた。今更遅いと罵られるかもしれないが、それでもこのまま黙つたままではまじだろつ。

帰国以来、街を歩いていてビルの間から少しだけ見える太陽を見ると、ペラルーシで毎朝お決まりのように食べた目玉焼きを思い出す。銀色の器に仲良く3つ盛られてプルプルと震えていた。黄身の色が太陽のようだった。この同じ太陽をペラルーシの人々も見ているのだろうか。地球なんて意外にちっぽけなものだ。気の持ち方次第でいくらかでも近くなれるだろう。私はもう彼らに出会ったのだから、例え飛行機で何時間もかかる距離にしようとな隣人であり、友人である。友人のためなら私にできることは是非やらせてもらおう。

地球の全ての人々が幸せでなければ誰一人として幸せではない。

雪だるま号の廃車に際して



ありがとう、雪だるま号

7年間走り続けて、紡いだ人のつながりを、

かけがえのない遺産として

7年間、ベラルーシの大地を走り続けた雪だるま号が、ついに廃車になりました。とにかく、もうボロボロだったようです。この間、チエルノブイリ支援運動・九州による検診活動だけでなく、日本のチエルノブイリ支援団体の移動手段として走り続けた走行距離は、約30万キロ、地球をおよそ7周したことになります。

その様子はチエルノブイリ通信で「走れ雪だるま号」で連載していたので、会員の皆様もご存じのことだと思います。雪だるま2号を購入するための資金が集まらない今、こうした文章を書いていると、まるでその連載の後書きを書いているような気がして、気持ちも滅入ってしまいますが、雪だるま2号を購入できず、したがって今は亡き雪だるま号に、「初代」という称号を与えることもできなという現実のなかで、これまでの軌跡を

お伝えしなければなりません。軌跡、といっても実際に雪だるま号が走った距離とか、あるいは実際の走行図をを記すよりも、雪だるま号を通して得た忘れ得ぬ人々との出会いの系譜を辿ることの方が、雪だるま号にはふさわしいと思います。移動検診車「雪だるま号」がもたらしたものは、もちろん現地でのスムーズな移動ではあつたけれど、そこから導き出された運命的と言つべき出会いにこそあつたと思います。

子どもたちの心の声を

届けてくれたリユダのこと

チエルノブイリ支援運動・九州が甲狀腺がん検診に取り組み始めた当初、チエルノブイリ原発の直接の被害者である子どもたちの心に触れることは、日本国内で支援の呼びかけるうえで必要なことで

した。しかし、それはとても困難なことで、甲狀腺ガンを患うことによつて生じる恐怖、痛み、怒りを、異邦人である私たちに子どもたちが心を開いて語ってくれるはずもないことは、ある程度、予想していました。

それでも諦めずにミンスクの市内をあちこち動き回れたのは、現地の事情や地理に詳しいベラルーシ赤十字のドライバーと、そこに寄贈された雪だるま号があつたからです。そして、そのおかげで出会えたのが、当時22歳のリュドミラ・ウクラインカでした。



リュドミラ・ウクラインカさん

文／チエルノブイリ支援運動・九州

代表 矢野 宏和

17歳のときに甲状腺の摘出手術を受けた彼女は、その時受けた肉体的、精神的痛みを、心理学者としての仕事に役立てようと決めていました。甲状腺の手術を受けた子どもたちがリハビリを行う施設を、卒論を書くための実習の場として選んだリユーダは、自らの経験も踏まえ、甲状腺ガンが子どもたちに与える心理的な痛みを冷静に私たちに伝えてくれたのです。その後リユーダは2度、日本に來日して現地の実状を伝え、28歳になった今はカウンセラーと心理学者としてのキャリアを積み、大学ではすでに心理学の講義も行っています。出会いからもう6年が過ぎますが、初めて会ったときに、少し顔を赤らめて話していた将来のプランを次々と実現させていく彼女の姿には驚かされ、その逆境を克服して生きる強さに、今では尊敬の念すら感じています。

工房「のぞみ21」

ナターシャ、ステファン夫妻のこと

そのリユーダが所属する「コンフィデンス」という団体が紹介してくれたのが、甲状腺の手術を受けた子どもをはじめ、身体に障害をもった子どもたちを集めて

民芸品作りを営む工房「のぞみ21」でした。雪だるま号は、この時も速やかに約4時間の走行を経て、ゴメリの街で工房を経営するナターシャさん、ステファンさん夫妻のところまで運んでくれたのですが、その夫妻の最愛の息子が、甲状腺ガンにより命を奪われていたことに、出会ってしばらく、私は気づきませんでした。幼い頃に白血病を患った息子オレグが、ここで仕事ができるようにとこの工房の創設を思いついたこと、オレグが絵の才能に恵まれ、工房ではその技術を所員たちに教えていたこと。そんな話を聞き進めていくなかで、ナターシャさんから、その事実を告げられたのです。甲状腺ガンの発見が遅れ、それが肺に転移しての、20歳の逝去でした。

リユーダとナターシャさん・ステファ



ナターシャさん、ステファン夫妻

ンさん夫妻。この出会いのなかで、考えさせられたことはたくさんありますが、甲状腺ガン検診に取り組み私たちに最も深く刻み込まれたことは、次の事実です。リユーダの場合、甲状腺に結節ができていただけで、そこにガン細胞はななく、日本であれば甲状腺を摘出するようなことはなかったということ。逆に、オレグの場合は、甲状腺に生じたガン細胞が発見されず、死に至らなければならなかったということ。甲状腺を検診し、ガン細胞の有無を早期に明らかにすると同時に、不必要な手術を減らすことが、いかに重要なことが。

そして、まさにこの点において真剣に取り組んでいたのが、移動検診に参加するペラルーシ、日本の医師たちでした。

ペラルーシの医師との連携

アルツールさんと共同作業

検診を充実させていくうえで、最も大きな影響を与えてくれたのがアルツール医師です。彼は1996年から始まったストーリーン地区病院での年2回の検診に、毎回必ず参加し、エコーや吸飲穿刺の技術を学び、彼自身が行う日々の甲状腺ガン検診にその技術を活かしています



アルツール医師

た。アルツール医師の検診は、プレスト州全域を移動検診者で動き回り、学校や病院に寝泊まりしながら、エコー使って年間3万5000人という大量の患者を検診するもので、3日間で約80人程度の患者に吸引穿刺を交えた質の高い詳細な診察を行うチエルノブイリ支援運動・九州の検診と比べると、量の面ではるかに大きいものでした。アルツール医師が事前に検診を行いガンの疑いがある人を、チエルノブイリ支援運動・九州の検診に呼ぶことで、検診は量的にも質的にも充実し、この連携により確実に検診の成果は上がっていききました。

雪だるま号、

患者の移動手段として

しかし、それでも問題は残ります。例えば、適切な検診が行われたとして、検診室でベラルーシの人々に伝えられるのは、検診の結果だけです。「問題ありません」と日本の医師から伝えられれば、患者は安心感とともに家路につきます。が、「手術や検査が必要」という結果を伝えられた場合、ミンスクの病院で手術や診察を受けるか否かは、それぞれの患者の判断と事情に委ねられることとなります。「ストーリーン地区からミンスクまでの交通費が、ベラルーシの平均的な月収の半分を占める」というのも患者を取り巻く事情の一つです。

ミンスクでの手術や検査が必要になった場合、人々はどうのように対処するのか。それを明らかにするための現地での家庭訪問を、雪だるま号は可能にしてくれました。ミンスクでは自由自在に雪だるま号を操りどこにでも行けるベラルーシ赤十字のドライバーも、地方の町ストーリーンでは、病院から教えられた住所のメモを道行く人に見せながら、案内してもらわなければなりません。訪問した4つの家庭はそれぞれに異



患者を乗せて走る雪だるま号

なる事情がありました。が、甲状腺の手術を受けた子どもがいること、ミンスクへの交通費が家計の負担になっているということは一致していません。

そして、この取材から、ストーリーン地区の患者がミンスクに行く際の移動手段として走るといって、雪だるま号の新たな役割が生まれることになりました。雪だるま号の寄贈先であるベラルーシ赤十字の了解と協力を得てそれは実現しましたが、このときの協議をよりスムーズにしてくれたのが、当時ストーリーン赤十字支部長だったユーリさんでした。それがどんなに必要なことであれ、チェルノブイリ支援運動・九州から、患

者さんのために雪だるま号を走らせてくれと申し出るの、とモすると越権行為となり、押しつけ型の支援となってしまう可能性があります。この辺のことは、国際間の支援活動の難しさでもある

のですが、この場合は、ストーリーン地区からの要望を踏まえたうえで協議に入っていくことに留意しなければなりません。ただし、私たちのベラルーシにおける滞在期間も限られておりこれまでも何回か交渉が先延ばしになっていました。そんな状況において、彼が速やかに要望書を整えてくれたおかげで、私たちは滞在期間中にベラルーシ赤十字と協議することができ、雪だるま号はストーリーンの患者さんのために走れることになったのでした。

初めて雪だるま号が患者さんを乗せてミンスクまで行ったことを、チェルノブイリ通信に掲載したときの誇らしい気持ちを、私は今でも覚えています。でも、その雪だるま号が廃車となった今、それを遠い昔のことのように思えます。多分、ミンスクへの交通費は再び

家計を圧迫しているはず。です。

カーチャ医師のこと

悲しい別れ

時の流れのなかで、人であれ、車であれ、形あるものは皆、この世をさつていきます。でも、それが親しい人であり、しかもその去り際が唐突だったりすると、その悲しみはことさらに深くなるもの。雪だるま号が走り続けた7年間という月日は、ベラルーシに親しみを生み出すには十分な長さであり、それゆえに私たちは大きな悲しみに遭遇することになります。

一緒に検診活動に取り組んでいたベラルーシのカーチャ医師の死、それは、



今は亡きカーチャ医師

あまりにも唐突な出来事でした。ある年の瀬ガスの爆発事故で、生まれたばかりの子どもと一緒に彼女がこの世を去ったのは、ある人はお祝いのメッセージを、ある人は赤ちゃんのための産着をプレゼントに贈ろうとしていた時の出来事でした。

チェルノブイリ支援運動・九州の医師団が滞在するホテルに、いつも一番最初に出迎えてくれたのが、彼女でした。検診活動だけでなく、私たちをもてなす仕事を、そのまま喜びとしているかのよう。

こんなこともありました。冬の寒い日に、髪を洗って外に出た女医を見て、風邪を引かさないようにと彼女はすぐに自分の帽子をかぶせてあげていました。検診中、単調な問診をしているときや、例えば私が幾分つまらなさそうに検査のため集められた尿の処理をしているときも、にこやかに手伝ってくれ、沈みかけた部屋の空気をさっと入れ換えてくれるのです。当然、皆、彼女のが好きだったから、いつも彼女のまわりには人が集まっていたのです。

それを別れというにはあまりに唐突過ぎて納得できないけれど、それから後の検診では、いつも彼女の不在を感じずにはいられませんでした。

雪だるま号の車窓に浮かぶ人々の思い出を

迎れば、この文章がいつ終わるとも分かりません。その雪だるま号も、今はなく、新たな2号の購入に向けて、がんばっていくしかありません。悪戦苦闘のなか、唯一の救いは、やはり雪だるま号が残した功績にあります。それがいかに重要な役割を担っていたかは、この7年間の活動が十分に語ってくれています。移動検診車としての走行はもちろん、海外からの支援物資の運搬や患者さんの移動手段として活用されたこと。また、日本国内の支援団体がベラルーシでの移動手段として雪だるま号を「共有」できたことは、今後の支援活動の展望を明るくしてくれたと思います。そして、何より、文字通り雪だるまのようにベラルーシの大地を転がりながら、豊かにしてくれた出逢いの連なりは、とても大きな財産です。

雪だるま号が廃車となり、チェルノブイリ支援運動・九州の検診活動も新たな変化の時期を迎え、この秋に予定された検診は来年に延期になりましたが、チェルノブイリ支援運動・九州では、来年には雪だるま2号による検診を目指しております。チェルノブイリに関するすべての人々のご理解、ご協力を、どうぞよろしく願っています。

雪だるま2号キャンペーン展開中

新しい雪だるま号を購入するための支援をお願いします。



必要金額
300万円

2003.11.25における募金金額 170万6,832円

↓ 雪だるま2号へのカンパはこちらまで ↓
郵便振込口座 01770-1-65328 チェルノブイリ支援運動・九州
「雪だるま2号カンパ」とご記入ください。

雪だるま2号キャンペーン 朗読とリードオルガンの共演
『チェルノブイリのたんぼぼ』
 ~足踏みオルガンと絵本とわたし~を終えて

絵本作家 小野 正法が感じたこと…

世間の厳しさと少しだけ認められるって経験を与えられた一日でした。



自分の作品を朗読する小野さん

僕はこのコンサートでも貴重な経験をさせてもらいました。

それはコンサート当日のことです。僕の順番は後半で他の作品も読んでもらいたくて読み用で絵本を何冊か置いていたのですが…

なかなかだれも見えてくれません…

見てくれても1、2ページあたりで絵本を閉じてしまうのです。「やっぱりどこの馬の骨かわからん奴の絵本なんて興味ないんだろうなあ…」と不安と緊張を駆り立てられてました。

そしてとうとう僕の出番がやってきました。

幼稚園や施設での読み聞かせとはちがう雰囲気ややっぱり緊張しましたがこの日のため

に福田さんや井上さんとたくさん練習したので一生懸命読みました。

なんとか読み聞かせが終わり、良かったのか？ 悪かったのか？ わからなく怖がってる僕に矢野さんが「よかったよ！」と握手を求められたとき「よかった」と安心しました。

公演も終わり帰るお客さん達を見送ろうと出入り口に行く…

そこには沢山の人が立ち止まって僕の絵本を読んでくれてる光景が目にはいつてきました。

その光景を見てとても胸が熱くなりました。世間の厳しさと少しだけ認められるって経験を与えられた一日でした。

音楽をつけてくれた福田さんや映写機で絵をだしてくれた井上さんや事務局の方々、そしてたくさんの方のボランティアと嵐なのに来てくれたお客さんに支えてもらい楽しく公演できたコンサートでした。

チェルノブイリを知るうえでいくつかの物語を思い浮かべ、そうしてできたのが『チェルノブイリのたんぼぼ』です。

僕もチェルノブイリのことを書くことと決めるまでは「どこかでおおきな事故があって放射能が漏れて大変だった」頭にあったのはそ

れぐらいでした…

だから沢山のチェルノブイリの本を読みました… 書くためには良く知っておかないといけないと思ったからです。

でも知っていくうちに物語は作れなくなりました… 僕は怖くなったからです… 本で得た知識だけで… 中途半端な知識でチェルノブイリを語っていたのか…？

本の知識だけじゃなく実際に見たもの聞いたこと… 僕にはそれがなかったからです。そんなときたびたび相談をしていた谷口憲さんや支援運動の人達の動きを見せ付けられました。

最初の意図から怖くなって逃げて指向を変えてきたこの『チェルノブイリのたんぼぼ』は言わば僕の失敗作です。

でも僕はこの『チェルノブイリのたんぼぼ』が大好きです。

だって色々な人達を知って・見て・聞いて感じてできたのがこの『チェルノブイリのたんぼぼ』だからです。

書きかけていたいくつかの物語を僕がいつか完成できる時がくるまで僕はチェルノブイリに関わっていきたいと思っています。

小野 正法

2004年夏 ベラルーシ調査隊員を募集しています！！

チェルノブイリ原発事故から17年、 現地の実状をより深く学んでいきませんか。

調査期間：2004年7月から8月の約2週間

派遣予定人数：チェルノブイリ支援運動・九州 運営委員、事務局 2～3名
 通訳、コーディネーター 2名
 一般公募メンバー 3～4名

滞在地(候補)：ベラルーシ共和国ミンスク(首都)、
 プレスト州プレスト市、ストーリン地区 ゴメリ州ゴメリ市

調査内容(例)：一 現地医療機関(ベラルーシ赤十字、ミンスクやプレストの病院)訪問。
 一 現地の人たちの健康状態や、必要な支援内容、支援のあり方について調査。
 一 チェルノブイリ事故被災者の家庭訪問、聞き取り調査。
 一 被災した子どもを支援する現地NGO“コンフィデンス”の事務所訪問。
 一 被災者が働く福祉工房“のぞみ21”訪問。

* 現地調査に参加したい人、参加できないが関心があるという人が集まって、チェルノブイリやベラルーシについての事前学習会(月1回から2回)を通して、調査の内容を検討していきます。遠隔地の人とは、メールの意見交換などをおして、情報をシェアします。

派遣までのスケジュール：2003年12月～3月派遣メンバー募集。

 2月～6月学習会を通して、調査内容検討

調査隊参加費用：約20万円

募集締切：3月末日

派遣調査隊参加資格：

* チェルノブイリ事故や事故後の被災地のこと、被災者支援の活動、もしくはベラルーシ(旧ソ連邦)に関心があること。知識・経験等は問わない。

* 月1～2回行う学習会になるべく参加できること。(遠隔地の場合は、ご相談に応じます)

お問い合わせは…チェルノブイリ支援運動・九州事務局

福岡県遠賀郡水巻町下二西3-7-16(株)ウインドファーム内

TEL・FAX 093-203-5282 E-mail jim@cher9.to

2日間だけのチャリティーショップ

スネガビーク(ベラルーシ語で“雪だるま”)手芸店が開かれました。



スネガビーク手芸展の様子

11月29・30日、福岡市中央区大名のギャルリーブードリアンにおいて、雪だるま2号をベラルーシに贈るためのチャリティーショップが開設されました。
陶芸家のくぼともこさんを始め、
“雪だるま2号キャンペーン”を応援するアーティストの方たちがそれぞれの作品を持ち寄って開いてくれたお店です。「のぞみ21」の手芸品も加わって、いろんなかわいい雑貨たちがそろった2日間になりました。

完璧なる医療支援とは…

チェルノブイリ支援運動・九州 事務局長
谷 口 恵



検診の準備に取り組む事務局の様子

日本の医師団をベラルーシに派遣して行われる甲状腺ガン検診。いつも検診の様子はチェルノブイリ通信でお伝えしているが、その検診に欠かせない事前の準備にスポットが当てられることはない。聞き慣れない医療用語や検診に必要な器具を手配し、それらを遠いベラルーシに届ける準備は、めくるめく国際情勢のなかで、時に過酷な仕事となる。普段、あまり知られることのないチェルノブイリ支援運動・事務局の仕事ぶりをお伝えする。

わたしが事務局としてチェルノブイリ支援運動・九州の活動に関わるようになってから3年が経とうとしている。この間、4回、検診団として専門家や調査メンバーを送り出した。正直なところ、ただの一度も「今回の派遣は大成功!」「完璧!」という満足感を持ったことがない。はたして、「完璧で大成功な支援」なんて存在するのだろうか?

検診まであと数ヶ月、という時期になると、いつになく気持ちをピンと張り詰める。「検診」という怪物のような山が目の前に立ち上がるからだ。ここからは、真つ暗で先が見えない。さて、この山を成している大小の岩をひとつひとつ取り除いて、崩していかねば… 参加者の決定、日程の調整、現地との連絡の折り返しをつけること、お財布具合との相談、ビザの手続き、支援物資内容の決定、大量の支援物資の輸送とベラルーシへの持ちこみのための手配… 検診派遣日程へのカウントダウンをしながら「この時期までにしなければならぬ」とは…」と、検診を作り上げるための要因それぞれをバランスをとりつつ、一日に何度も繰り返し確認する。一日に何個もの岩をポイポイ、と軽く投げ捨てる

ことができる日もあれば、1つの岩さえも持ち上げられない日もある。そうするうちにちよつとつ山は低くなり、少しずつ光が差し込んでくるようになる。向こうの景色が見えるまであと一歩!「なんだ、ここまで調子いいなあ。楽勝楽勝。」と鼻歌まじりになってくると、たいてい落とし穴が待っている。突然「がっかり」の底に突き落とされて、

土砂崩れしてきた岩に押しつぶされる。ちよつぱり見えかけていたベラルーシの広い青空は、黒い雲にかくれてしまふ。落とし穴の原因は様々だが、特に、ベラルーシという国にいる人達を相手に活動をしていることによるものの場合が大きい。予定していた医療専門家が急に仕事で行けなくなつたとか、予算が足りないとか、それも泣きそうなくらい(本当に泣いてしまうこともあるけど)大変な出来事ではあるが、なんとか出来なくはない。信頼できる代わりの方を紹介していただくとか、涙をのんで物資の数を削るとか(業者さんに頼み込んでディスプレイしてもらうとか)、穴から自力で這い出す方法がいくらかはある。

しかしそれが、ベラルーシという国もしくは制度、言いかえればわたしたちが住んでいる日本の「常識」との違いとい

う六だった場合、簡単には這い上がれない。今年7月の検診の際にも、その前の回には必要のなかった書類を現地に置いてから求められ、それがなかったためにあやうく支援物資を届けられずに終わるところだった。毎回、「行ってみてから初めて分かる新しい制度・手続き」があり、そのたびに泣かされる。「前回はこれでいいって言ってたやんか」と吠えたところで許されるものでもない。年々、支援物資の通関審査が厳しくなってきたのだ。

ベラルーシという国自体、『欧米最後の独裁国家』と呼ばれることもある、日本とは違う性格を持つところだ。その体制化では、政府に認可された団体でないと支援活動を行うのは難しい。また、わたしたちのように大量の医療支援物資を運ぶ場合には、ロシア・モスクワ経由では通してもらえないという難点もある。そのため、渡航費は高くつくがドイツ・フランクフルト経由で行っている。現地医療機関とのやりとりの中でも、旧ソ連邦特有の制度や慣習がわたしたちの支援活動を難しくする場合がしばしばある。

そのほかに、ベラルーシだから起こってしまうトラブルを並べればキ

リがないので、細かく書くのはやめておこう。もちろん、どこの国の人達を相手にやりとりをする場合でも、予想外のトラブルはつきものなのだろう。どこであつても、言葉や文化、習慣の違いが、思わぬ誤算を生む。それに加えて、わたしたちは『医療支援』という、踏み込んだ活動を行っている。そのぶん、ただの『交流』では見えてこないような複雑な部分を相手にしていかなければならぬのは当然だろう。言ってみれば、わたしたち自らわざわざ困難なほうへ向かって歩いて行っているのだから。

お隣りウクライナはODA対象国だが、ベラルーシは対象国に含まれていない。外務省の方に理由を聞いてみると「経済面で見れば対象国となるべきレベルだが、あまり民主化がすすんでいない国だから」という返答だった。民主的でない国の場合、国のトップや富裕層が着服するなどしてきちんと援助すべき人のところまで行き届かない場合がある、ということなのだろつ。その点わたしたちは国を相手にして支援をしているわけで

はない。ベラルーシにいる「ひと」を相手にしており、信頼できる人との顔の見える関係のもとでその人たちから求められている支援を行っている。煩雑な作業の山を乗り越えた向こうに見えるのは『独裁国家』ベラルーシではなく、わたしたちを温かく迎えてくれる人たち、そして悲しい過去と向き合い共存し続ける強い『生きる力』なのである。

毎回毎回トラブルに直面しながらも、必要なところへ必要な支援を届けることができてるのは、『信頼』でつながった人間関係があるからだろう。穴に落ち込んだわたしたちに、手をさしのべてひっぱり上げてくれる。現地の赤十字や医療機関の方々、現地スタッフのリユータ、医療コーディネーターで通訳の山田さん、活動に賛同して下さる医療

専門家、募金者やボランティアなどの協力者、運営委員…それぞれが少しずつ出し合う、「自分にできること」の集まりが、道をさえぎる頑丈な岩を溶かしていく。

活動をはじめた頃には、「たくさんの人達から寄せられた貴重な募金を預かって支援をしているんだ、常にベストな結果を出さなければ」という気負いがあつたのかもしれない。もちろん、ベストを目指して誠実に取り組むのは当然のことだ。しかし、支援活動を行っているのに大切なことのひとつは、「ベストがダメならベターにする」寛容な心構えと行動ではないだろうか。様々な違いを持つ人たちと、様々な違いを持つ国を相手にやっていくのだ、トラブルがあるのはあたりまえ。いちいち沈んではいけない。いろんな人達の手を借りながら穴から這い上がって、なんとかかんとか手探りで作っていくたくましさが必要なようだ。きつとそのうちに、大地と背中をびったり合わせて、青い大空を胸いっぱい吸い込める日がくるだろう。その時を思い描いて、今日も事務所です岩をひとつずつ砕いていく。



ベラルーシに届けられた支援物資

たくさん募金をありがとうございました。

(敬称略・順不同)

家永世支乃 村田史枝 長谷川明子 中村洋子
 稲田照子 宝住真知子 衛藤基邦 めぐみ保育
 園職員一同 田川未来塾 高山幸子 相川美智子
 竹田照 木下るみ 三浦孝士 木村みさ子 川
 原英照・久美子 稲吉清子 鬼束耕子 三本和 山
 口倫子 医療法人くまがい産婦人科 桧垣光子
 池田陽子 山口華子 宮原動物病院 山本行文・香
 藤田一美 椋島一郎 小島輝巳 深堀ミチ子
 梶村静江 遠藤礼子 林田良 サトウ矯正歯科ク
 リニツク 村上和代 井上洋子 西川弘美 学校
 に行かない子どもを支える会松下規子 西井久芳
 島田まゆみ 林田洋子 田村志子 山崎隼史
 小崎たま 村上善子 吾郷美代子 中島鈴子 田
 淵英久 添田恵 水落靖子 入浜祥子 徳矢好章
 松田久美子 前田祐子 佐藤恵美子 堀切レイ
 子 納富育代 松本みね子 井原正喜 日高太
 竹田恵子 佐々木孟 佐藤照子 医療法人明保会
 保元内科クリニツク保元徳宏 水車むら農園臼井
 太樹 竹田照 木真知子 綱脇牧子 山田美佐
 子 川崎君子 坂中浩子 重高恭子 桧原こひつ
 じ幼稚園こひつじ基金 小澤嘉世 坂本薫 峯和
 子 かどもと眼科医院加登本紘 末廣治江 上里
 恵子 秋永優子 七條真明 植村仁美 佐々木靖
 子 井上秀子 信畑真紀・チェルノブイリ被害調
 査・救援・女性ネットワーク吉田由布子 永野裕子
 森徳子 大賀和男 守山美佐子 筒井重子
 大瀬美都子 渋谷裕子 長崎外短コースホステル
 クラブOB会 古賀尚子 石津葉子 土持秀男・由
 利子 大平実紀 須藤利恵子 河上しげみ たん

ぼぼとりで グリーンコープ生活協同組合くまもと
 と 忠専寺河野知曉 じゃがいものおうち チェ
 ルノブイリ友の会伏尾台菊池順子 力丸邦子 グ
 リーンコープ生活協同組合おおいだ 筑豊互助会
 グリーンコープ生活協同組合くまもと 医療法
 人淵レディスクリニツク 中津和幸 三本和 屋
 久島エコ・フェスタ杉の茶屋 前田晶子 松本弘子
 ふれあいハウストマト館 ほか多数
 (二〇〇三年八月一日より十月三十一日までの募金
 です。通信にお名前を紹介することを許可頂い
 た方、ならびに「のぞみ21」民芸品、チェルノブイ
 リ支援コーヒーの購入を通して活動を支援下さっ
 た方のみ、掲載しています。)

三千元コース 二九二、五〇〇円(一〇〇口)
 五千円コース 一三三、五〇〇円(二九口)
 一万円コース 七二、〇〇〇円(八口)
 雪だるま2号カンパ 八五二、〇四二円(二〇口)
 その他カンパ 三二五、二七一円(五七口)
 (分割払いの方もいるので、数字は割り切れていま
 せん。)

合計 一、六六二、三三三円

★おわびと訂正★

チェルノブイリ通信57号最終ペー
 ジに掲載の誤りがありました。下記
 のとおり改めて掲載させていただく
 とともに、お詫びを申し上げます。
 “ブレストにおける第3回検診”に
 は、財団法人福岡国際交流協会より
 「福岡国際協力人材育成助成金」とし
 て専門家派遣費20万円を頂きました。

募金者からのメッセージ 一部抜粋

子どもが生まれてから世界の子どものことが気に
 かけられます。少ないですが少しでもお役に立てれば
 コーヒーおいしいですよ。ありがとうございます。少しでもお役
 にたてば。通信をいつもありがとうございます。自
 分にできる事から始めます。雪だるま2号の足しにし
 て下され。 Good Luck お便り有難うございました。
 心痛みます。読み終え知人に転送しました。みんなに関
 心もってもらいたくて。 神田香織さんの講談、見たい
 です。 わずかなものですがお役に立てれば幸いです。
 新しい雪だるま号のために。 がんばって下さい！
 チェルノブイリ通信ありがとうございます。 すべての
 原発が止まらぬ、終わるものは何も無い。放射能の被害
 者が2度と出ないように。 がんばって下さい。 ほん
 とくに少しの額でごめんなさい。 地道な活動を息永く
 継続されていることに、敬意を表します。 武市さんの
 記事良かったです。(雪だるま2号)早く買えますよう
 に。 気持ちだけですが、少ない金額ですが有意義
 に使って下さい。 地道な活動、本当にこころうさまで
 す。ほんの少しでごめんなさい。 頑張ってください。
 涼しくなつてあたたかいコーヒーが一段とおいしくなり
 ました。 コンサートどうもありがとうございます。
 子どもたちの幸せをいつも願っています。 どうぞが
 んばって下さい。 今後とも、皆様お元気で活躍下さ
 い。 すばらしい活動に共鳴。 「厄おとし」で募金する
 ようになって11年です。 これからも応援します！ 亡く
 なった父が大学でロシア語を学んでいました。 父の想い
 を託して、母が1口参加させてもらっています。 わず
 かですがお役に立て下さい。 地道な活動に頭が下がります。
 これからも応援して参りたいと思います。 いつも
 有難うございます。 たまにしか振りこめなくてごめんな
 さい。 活動の一助になればと思います。 ブレストに
 住む人々が、どれほど医療検診を待ち望んでいることが、
 通信から強く感じることが出来ます。 医療検診が一回
 でも多く続けられますことを、祈り続けたいと思います。